

日本鱗翅学会 チョウとガ フォトコンテスト 2023

結果発表

「日本鱗翅学会 チョウとガ フォトコンテスト 2023」として、会員外も含めた皆様から「チョウとガの不思議な生態」をテーマとした写真を公募いただきましたが、全国から一般の部に 25 作品、学生の部に 10 作品のご応募を頂きました。誠に有難うございました。

プロ写真家による審査により、ご応募いただいた 35 作品の中から、「一般の部」と「学生の部」の 2 部門で、次のとおり入賞者を決定いたしました。全体の作品数は前年より減少したものの、審査員の先生からは「今年はレベルが高かった」との評を頂いております通り、皆様が苦勞して撮られた素晴らしい作品が揃いました。なお、一般の部特選の真田豊誠氏が 2023 年 10 月 31 日に、学生の部特選の橋本敦己さんが 2023 年 12 月 18 日に、それぞれ急逝されたとの訃報を頂きました。今回応募いただいた作品がお二人の遺作でもあります。お二人がこれらの作品に込められた思いを、会員の皆様にも感じていただき、お二人のご冥福を心よりお祈りいたしたいと思えます。

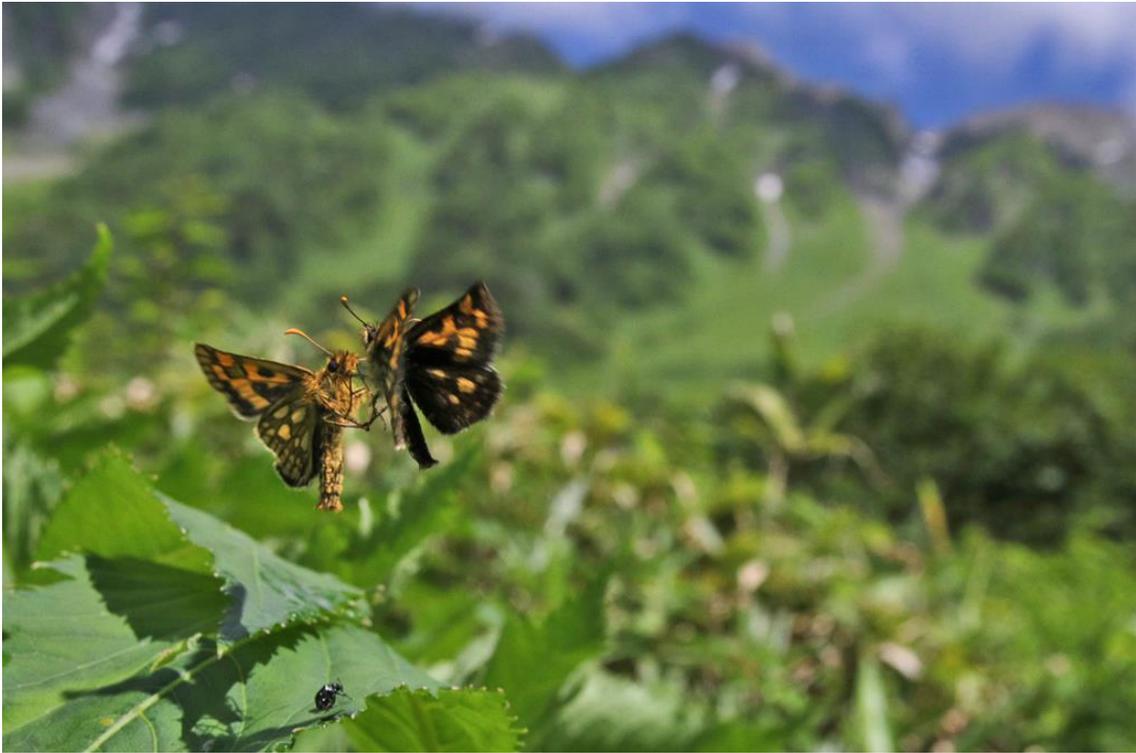
今年も、チョウとガ フォトコンテスト 2024 を開催予定ですので、さらに多くの方々からのご応募を期待いたします。

日本鱗翅学会フォトコンテスト事務局

※ 次頁以降に入選作品の紹介がありますが、同一選内の作品について、掲載順はレイアウト優先で決めているため、入賞順位とは関係ありません。

グランプリ

鶴藤 俊和 『タカネキマダラセセリの卍飛翔』



作品解説

卍飛翔を狙って、穂高の稜線を背景にテリ張り中の雄の前でカメラを構えて待ちました。わずか 2 カットしか撮影出来ませんでした。雄同士が相手を捕まえようとするシーンが切り取れました。

表現したかったチョウやガの不思議さ

求愛時にメスを十分に識別できないため、動く物に飛びつき、オス同士が脚で相手を捕まえようとしています。

一般の部・特選

真田 豊誠 『ウラギンヒョモンとクモガタヒョウモンの衝突』

作品解説

アザミを訪れるヒョウモン類を撮影していた折、猛スピードで飛び交う2種類のヒョウモンが鉢合わせしてしまった。その瞬間を偶然撮影できた。



表現したかったチョウやガの不思議さ

2種のチョウが衝突した瞬間、まるで1頭のチョウに4枚の羽があるかのように見えて面白い。

一般の部・特選

高崎 明 『フタオチョウとオキナワカラスアゲハ』

作品解説

左上のオキナワカラスアゲハを追尾飛翔していた中上フタオチョウ(1)が、テリ張りしている右下フタオチョウ(2)を見つけたら目標を同種に変えて急降下した。



表現したかったチョウやガの不思議さ

チョウの追尾は異種に対しても良く行われるが、同種を見つけた時は同種を優先した。

一般の部・準特選

竹内 剛 『*Favonius* の繁殖干渉』

作品解説

鱗翅学会近畿支部が主催する三草山ゼフィルス調査会での一コマ。ヒロオビミドリシジミのオスが何かを追いかけているのを見ていたら、ナラガシワの葉上に止まったウラジロミドリシジミのメスに交尾行動を示した。



表現したかったチョウやガの不思議さ

チョウは人間よりもはるかに曖昧な世界認識で生きていること。

一般の部・準特選

佐藤 伸一 『コヒョウモンモドキのお見合い』

作品解説

コヒョウモンモドキの求愛行動を観察していると、その内に顔を突き合わせて、お見合いする形になった。ちょっと高い葉の上でのお見合だったが、雄雌が間近で見つめ合う姿を撮影することができた。



表現したかったチョウやガの不思議さ

ヒメシロチョウなどが顔を突き合わせて求愛することがあるが、間近で見つめ合う行動は不思議な生態である。

一般の部・準特選

吉村 久貴 『潮風の中で』

作品解説

交尾しているシルビアシジミのペアに、別の♂が盛んに絡んできたが、全く動ずることなく2匹だけの世界に入り込んでいた。気温35℃の猛暑の日、北限に近い奥能登の生息地で、日本海を背景に撮影した。



表現したかったチョウやガの不思議さ

天候によっては、もろに日本海の荒波をかぶるような過酷な環境で、しっかりと子孫を残している。

一般の部・準特選

岸村 高洋 『山のギンイチモンジセセリ』

作品解説

高山のギンイチに会いたくて1,600 mまで登ったら、わずかに残る小さな草原に数頭が可憐に舞っていたので嬉しくなった。おそらく年1化の発生と思われるが、今年のこの異常な暑さを思うと、こんなに早く出てしまっても大丈夫なのかと行く先がとても心配になった。



表現したかったチョウやガの不思議さ

スキの間を縫うようにチラチラとす速く飛び回り中々写真を撮らせてもらえないけれど、時には数頭が戯れるように絡む。その姿の可愛らしさをねらってみた。

一般の部・準特選

蓑原 茂 『ハンマースネーク触るべからず』



作品解説

スミナガシの終齢幼虫である。大きく口を開いたへビの頭は尾部である。持ち上げて威嚇している。つついたら隠していた頭ごと角が飛んできた。角は擬態と思っていたら武器だったのだ。強い衝撃の瞬間を捉えた。

表現したかったチョウやガの不思議さ

尾部は蛇に擬態、頭にはハンマー。組み写真にすることでその巧妙な防御機構を表現したかった。

一般の部・入選

保坂 満 『次世代につなぐ産卵』

作品解説

この場所では多数のヒメシロチョウが舞っていました。メスを追いかけていたところ、ちょうど産卵の瞬間を捉えることができました。

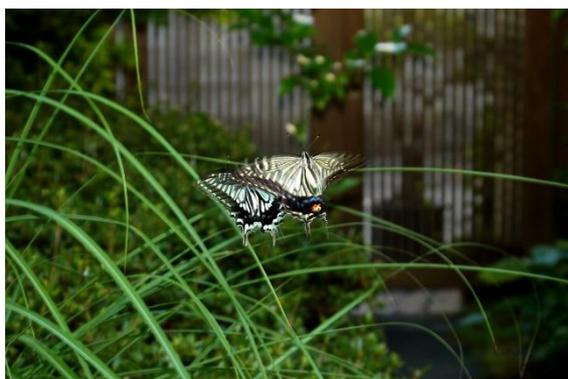


表現したかったチョウやガの不思議さ

この蝶は日本各地で減少が伝えられていますが、次世代につないで、いつまでも発生が続いて欲しいと思いました。

一般の部・入選

南 尊演 『ナミアゲハ雄・雌』



作品解説

偶然、自宅の庭でナミアゲハ 2 頭が絡むように飛んでいたものを運良く撮影できました。

表現したかったチョウやガの不思議さ

右の個体が雄ですが、雌に背を向けて飛ぶとは意外でした。

一般の部・入選

安川 憲 『交尾するアサギマダラ』

作品解説

筑波山におけるアサギマダラは、6月頃から麓付近の林道沿いでコイケマに産卵し、その後7月下旬から8月上旬に羽化すると報告がある。8月中旬から姿を消し、9月中旬に東北地方から南下し、更に南から南西方向に移動して行くと推察されている。7月24日につ



くば市筑波山御幸ヶ原付近でアサギマダラの標識調査をしていたところ、交尾中のアサギマダラが小木の葉上に飛来し休止した。そこで捕獲して標識し元に返して撮影した。雌(左)は新鮮なことから付近で羽化した個体と、雄(右)は翅が全体的に擦れており移動してきた個体と推察される。

一般の部・入選

小林 茂樹 『紅をさす』

作品解説

ハナミズキの花と総苞。上と右の苞の表皮をミズキコハモグリの幼虫が潜って食べ、茶色の潜り痕の周囲が紅色に変わっていた。幼虫は苞の縁を折り曲げて蛹になっていた。



表現したかったチョウやガの不思議さ

思わぬ場所に潜る小さな蛾類がいること。それがアートのようにになっていること。

一般の部・入選

前田 敏 『我が家の庭のジャコウアゲハ』



作品解説

自宅の庭に生息するジャコウアゲハを一年を通して観察しています。ジャコウアゲハの幼虫は毒のあるウマノスズクサを食草としています。成虫は庭に咲く花々を吸蜜し、ウマノスズクサに卵を産み付けます。

表現したかったチヨウやガの不思議さ

幼虫は蛹になる前にスズクサの根本を噛み切るので、他の幼虫は茎だけ残ったスズクサを必死に食べます。

一般の部・入選

安川 憲 『交尾するアサギマダラ』

作品解説

筑波山におけるアサギマダラは、6月頃から麓付近の林道沿いでコイケマに産卵し、その後7月下旬から8月上旬に羽化すると報告がある。8月中旬から姿を消し、9月中旬に東北地方から南下し、更に南から南西方向に移動して行くと推察されている。7月24日につ



くば市筑波山御幸ヶ原付近でアサギマダラの標識調査をしていたところ、交尾中のアサギマダラが小木の葉上に飛来し休止した。そこで捕獲して標識し元に返して撮影した。雌(左)は新鮮なことから付近で羽化した個体と、雄(右)は翅が全体的に擦れており移動してきた個体と推察される。

一般の部・入選

小林 茂樹 『紅をさす』

作品解説

ハナミズキの花と総苞。上と右の苞の表皮をミズキコハモグリの幼虫が潜って食べ、茶色の潜り痕の周囲が紅色に変わっていた。幼虫は苞の縁を折り曲げて蛹になっていた。



表現したかったチョウやガの不思議さ

思わぬ場所に潜る小さな蛾類がいること。それがアートのようにになっていること。

学生の部・特選

橋本 敦己 『共存社会』

作品解説

この作品は蜘蛛の巣に引っかかってしまった蝶が蜘蛛に襲われているところを、さらにカマキリが蜘蛛と蝶を狙っています。私が蝶を追いかけていたら、ちょうど蜘蛛の巣に引っかかってしまい、そこを撮影しました。

表現したかったチョウやガの不思議さ

蝶という美しい生き物も、自然界を生き抜くのは厳しく、他の生物が生きるための資源でもあるということ。



学生の部・準特選

川島 府久 『汗ちょうだい!』

作品解説

地面に流れている水に、吸水のためにサカハチチョウが飛んできました。近づいても逃げなかったので指を近づけてみたところ、そのまま手に乗ってきてくれて汗を吸水していました。

表現したかったチョウやガの不思議さ

チョウは一般的に人間が近づくと逃げてしまいますが、時にはチョウの方から寄ってくることもあるということ



学生の部・準特選

久井 花恋 『アイノミドリシジミの卍巴飛翔』

作品解説

磐梯山を登っているとアイノミドリシジミが目にも止まらぬ速さでくるくる回って飛翔しているのを見つけた。すぐにカメラを準備し、高速撮影を行い、写っていたのがこの一枚だ。



表現したかったチョウやガの不思議さ

小さく、光り輝いている2匹のチョウが乱舞している姿は美しく、神秘的であった。

学生の部・準特選

土居 咲貴 『風に耐えるタイワンヒメシジミとタヌキコマツナギ』

作品解説

大学での調査中に畑の横を散策していた所、タヌキコマツナギが生えていました。風が強い中、小さなチョウが飛んでいたのを止まったところを観察してみるとタイワンヒメシジミでした。



表現したかったチョウやガの不思議さ

1円玉よりも小さい体でありながら、強風に耐えつつ生きていることがとても興味深いと思いました。

学生の部・入選

末兼 いこい 『ちょうちよのおにごっこ』



作品解説

山のぼりのとちゅうで、けしきがきれいだなあ～としゃしんをとったら、そこへちょうちよがまいこんできました。

表現したかったチョウやガの不思議さ

くものしたでおにごっこなんてロマンチックだなあ～。

学生の部・入選

末兼 柊仁 『浅黄色の来客』

作品解説

フジバカマに集まるアサギマダラの飛翔シーンを撮影。人気の花が大体決まっているので定点で撮影できました。



表現したかったチョウやガの不思議さ

ほとんどフジバカマで吸蜜する不思議さ

学生の部・入選

仁地 悠人 『交尾するヒメヒカゲ』

作品解説

当時、道の無い山を1時間ほど登り、やっとの思いでヒメヒカゲに出会い、写真を撮っていると、交尾した2個体を発見した。高地の草原で密かに生き生きとくらしていることが分かった。



表現したかったチョウやガの不思議さ

食草は山を下りてもあるが、なぜ、山頂付近にしかいないのか、標高が下がっただけでいなくなるのが不思議に感じた。

学生の部・入選

渡邊 卓実 『肥後は魅た』

作品解説

肥後の名を持つ「ヒゴタイ」は、夏の暑い限られた期間で開花します。訪花するほとんどがハチ類ですが、肥後の国にふさわしい紅色の翅を携えてきたベニシジミ。花卉の横から覗かせる顔に魅せられました。



表現したかったチョウやガの不思議さ

ヒゴタイの青紫色の花の中に、一点、紅色がとても映えて見え、不思議な妖艶さを纏っていました。